

翔べ！
世界へ

異なる価値観を 学んだ日々

カー全員が日曜日に村中の吸い殻拾いをしたこともある。

同じことをさまざまな立場に立って考えなおしてみるということは授業の中でも教わった。歴史の教師は一番初めの授業で、「教師の役割は、一人の人間にまともに考える能力をつけること」といった（こう書くのが暑苦しく聞こえるが、授業は冗談が多かった）。二年間、歴史を履修して、扱った年代は一八九〇年代から一九八〇年代までの百年間だけ。相反する視点から書かれた膨大な書物を読まされ、各々の長短についての考えを発言することが期待された。十名程度のクラスだから、一時間発言をしないとひどく目立つ。今でもこの百年間以外の歴史をあまり知らないという弱点を意識しつつも、良い頭の体操になったと思う。

学んだことを社会に還元

そのような貴重な経験を積んだ者の中には、不思議な連帯感がある。UWCはイタリア以外にも、英国、米国、カナダ、シンガポール等、世界に数校あるが、それらUWCの卒業生会が活発な活動を行なっている。

また、私もインド在勤時代に、英国大使館の商務担当一等書記官がUWCの英国校出身であったが、そのとだけで妙な親近感を覚えた。

UWCの活動は、在学中に異文化と触れ合うことだけではなく、その場で得たものを何らかの形で社会に還元することが期待されている。しかし、その還元方法も在学中の考え方の多様性を反映して千差万別である。ルーム・メイトの一人はネパール人であったが、彼は飛び抜けて頭が良かったにもかかわらず、大学に進まずに母国に戻り働くことを選んだ。途上国からの生徒は往々にして奨学金を得て英米等の大学に進学することを希望するものであり、彼は家庭の事情でやむをえず大学進学を諦めたのかと思っていた。しかし先般、十年ぶりにカトマンズの下町で再会したときには、自信を持って、国際感覚を生かすのは国際的な場で活躍することだけではなく、自分自身ネパールの人の間に異文化に対する理解や寛容さを育てていると述べていた。

イタリアで過ごした二年間で、自分とまったく違う出発点から物事を考え始める人がいることを思い知っ

た。果たして、今後もこのような人々に出会う度に、自分の思考の柔軟性と寛容性を維持できるのか、そして日本と国際社会との間の橋渡し役として幾分なりとも貢献できるのか、我ながら心許ない面もあるが、貴重な二年間を過ごさせていただいたお返しに、微力ながらも最大限、努力していきたいと考えている。

経団連が事務局を務めている各種奨学金運営団体の活動により、毎年高校生から大学院生までの多様な奨学金が留学し、今日、その経験を活かして内外のさまざまな分野で活躍している。本コーナーは、留学先での経験と現在の活動の模様を紹介することにより、これら奨学金を送り出してきた奨学金運営団体への一層の理解促進と、これを支え、協力してくれた企業への活動報告とするものである。

(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC) 日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒達との教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年十名以上の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下のカレッジに派遣し、すでに三百二十名以上の卒業生を輩出している。

お問い合わせ・連絡先
経団連社会本部

濱本幸也

はまもと ゆきや

外務省総合外交政策局企画課

UWCアドリアティック・カレッジ（イタリア、1987～89年）

94年3月京都大学法学部卒業。94年4月外務省入省。96年9月エジンバラ大学大学院法学修士号取得。97年6月オックスフォード大学Foreign Service Programme修了。99年より現職。



UWCで培った国際感覚は、今も大きな財産となっている（オックスフォード留学中にコース・メイトと。左端が筆者）

生徒が学校運営にも参加できる校風

留学二年目のある日、生徒側のイニシアティブで授業の時間帯が変わった。それまで午後にあつた一コマ分の授業を午前中に移し、午後は授業がなくなった。始業時間が早まり、昼食が遅くなったが、授業時間の総計は変わらず、教師側も問題ないと同意した結果であつた。二年間の留学中、変わったのは授業時間帯だけではない。学校運営の多くの部分に（成功するか否かは別として）生徒側が元気に注文を付けていた。高校

世界各国の高校生と共同生活

の校則などというものは生徒にとつて所与のもので、現状追認的な場合を除けば生徒の側から変えられるようなものではないと思つていた私には新鮮であつた。

八七年から八九年までの二年間、経団連から奨学金をいただき留学したUWC（United World College of the Adriatic）は、その後の私の価値観の形成に多大な影響を与えた。学校には世界各国から十代後半の高校生が集められており、「国際社会」のミニチュア版を作り、寮生活を共に送らせることで国際感覚を身につけさせるというのが狙いであつた。二年間で六十カ国強から約二百人の生徒、そのうち日本人生徒は計四名であつた。IB（インターナショナル・バカロレア）に向けたカリキュラムを履修しながら、スポーツ・文化系の部活動を行ない、「ソーシャル・サービス（社会奉仕活動）」に従事する。勉強だけしていればよいのではなく、異なる価値観を持つ人々と交流することが求められていた。図書館に籠もる者は、それだけ

勉強に時間を割かなければ授業についていけないのかと白い目で見られた。

国籍、文化、母国語、宗教、親元の経済力など、社会的背景の異なる人々を集めている都合上、多少頭を使う議論はもちろん、日常生活の場においても自分が常識と考えていることは必ずしも通用しない。まったく想像もしないような素頓狂な発想や質問にもよく出くわした。視覚障害者のための社会奉仕活動をしていても、実感がわかないから、休暇を利用して一週間目隠しをつけて生活してみろ。日本人の目は細いのに、なぜ日本のアニメの主人公の目はいつも大きいのかと聞いてくる人。

さまざまな立場に立つて考える訓練

校内の明確な禁止事項は、麻薬の使用と、男女の仲が深くなりすぎること程度であつたと思う。理由は、そのようなことが横行すると、奨学金のスポンサーや地元社会の理解が得られなくなるからであつた。酒を嗜む者もいれば、たばこを吸う者もいる。その反面、自分のやったことの責任は十二分にとらされる。スモ